

令和3年度 富山市民 感謝と誓いの つどい 式典

1 富山市の紹介映像

2 国歌斉唱

3 黙とう

4 あいさつ

富山市長 藤井 裕久

5 中学生作文最優秀賞発表

朗読/声のライブラリー友の会 田中 悠美子

6 代表献花

とき 令和3年8月1日(日) 午後1時30分

ところ 富山国際会議場 2階多目的会議室

主催/富山市民感謝と誓いのつどい実行委員会・富山市

富山市自治振興連絡協議会 富山市社会福祉協議会 富山市遺族会 富山市老人クラブ連合会
富山市民生委員児童委員協議会 富山市児童クラブ連絡協議会 富山市母親クラブ連絡協議会 富山市PTA連絡協議会
富山市小学校長会 富山市中学校長会

空襲の体験文

「大空襲を顧みて」

小坂 行春

これから私が体験した「富山大空襲の実態」を辿りながら顧みたいと思います。

当時、日常生活に必要な主食の米は、全て国の経済統制で配給制度でした。夜は電灯の明かりが外に洩れないように電灯の笠に布を被せて対応しておりました。

また、敵の焼夷弾攻撃で火災が発生したときの消火活動の道具として、竹竿の先端に藁縄を適当に切って括りつけたモップと防火用水のバケツの備え付け並びに防空壕の設置が軍や町から督励されておりました。自宅前の空き地に十数名収容可能な簡易防空壕を設置し避難場所としておりました。

空襲を受けた八月一日の夜は、午後九時過ぎに警戒警報の第一報がラジオから入りB29爆撃機が静岡県の御前崎沖を通過北上敦賀湾に向かっているとの情報に続き、日本海に出たB29は北陸方面に進路を変えたとの情報から富山県に空襲の恐れがある」と空襲警報が発令されました。

八月二日未明、外で「ドンドン」「バリバリ」と言う異音に驚いて外に飛び出ました。現在の富山駅から西町付近かと思えますが、北方の夜空が真っ赤な炎で染ま打ち上げる時に空からは花火を「ウ」と言う凄惨な音と共に、焼夷弾が住宅地めがけて落下して来るのが目視できました。

こんな光景を初めて目の当たりにし、身震いしました。爆撃の

衝撃と恐怖に耐えきれず、母は私の手を引いて向かいの防空壕に急遽避難しました。この防空壕が後ほど人間の生死を分ける重要な事態を招く事になるうとは全く予期していませんでした。

避難するときの所持品は、容易に家に戻れる事を想定して、いつも毛布一枚だけで、学校の教科書を入れたリュックを背負っていました。しかし、防空壕では、物が燃える時の焦げ臭い異臭のする熱風が漂うようになり、外の異常を感じたので出てみると、空襲の度合いが益々酷くなり火の手は防空壕に近い梅沢町の「葉の広貫堂」近くまで接近していました。

母はこのまま防空壕にすることに身の危険を感じたのか、防空壕を脱出することになり、数人の避難者を残し近くの堀川小学校のグラウンドを指して再避難しました。グラウンドに避難して、家のある北方向を見ますと、住宅火災で燃え盛る火柱で赤く夜空が染まり、その一角に一際白く光るB29の機影が見え、数十機が編隊を組んで悠然と飛行していました。

敵機を迎え撃つはずの日本軍の戦闘機の機影は全く無く、敵国に制空権を握られており、全く無抵抗の様相に歯がゆい思いをいたしました。

富山市内全体が火の海に包まれた状態で炎の赤一色に染まり、だんだん火の手が南富山方面に近づいてくるようでした。身の危険を感じた母の指示で、再度、上滝街道を山手の月岡、上滝へと避難先を変更することにしました。

避難途中、本郷地内で富山連隊の兵隊さん通行を阻止され、稲穂が出揃ったばかりのたんぼに逃れました。兵隊は「お前ら非国民だ。家に戻り消火活動せよ。」と命令

していましたが、誰もその指示に従う者はおりませんでしたし、何とか自分の命を守りたい一心で避難を続けました。

何気なく兵隊さんの服装を見たところ、銃の代わりが竹槍、靴は地下足袋、水筒は竹製の筒という全くお粗末な装備でした。

また、農家の庭先には、四、五人の兵隊さんがいて対空砲火の高射砲にしがみつき砲弾を発射するのですが、射程距離が短く途中で炸裂してしまいい成層圏を飛行するB29には届かないお粗末な武器でした。

数時間に亘る避難の道程がありましたが、悪夢の夜が明け朝となり、自分達のいる位置を確かめたところ、月岡、大庄地域のたんぼの中に母と二人で座り込んでいました。突然、自分の家の状況を見たいとの衝動に駆られ、今来た上滝街道を逆戻りし、地鉄南富山駅の踏切までたどり着き、富山市内の様子を見ました。

通常、この場所からは見えるはずの無い大和百貨店と電気ビルのコンクリート製の建物だけが視野に入りました。何故見えたのか、その理由は近隣の各施設や家が火災で全焼倒壊してしまっ障害物が無くなったということ愕然とし、呆然と立っていた母の姿が深く印象に残っています。

それでも諦めずに家の確認をするため、焦土と化し異臭が漂う瓦礫の中を歩き回り、家の跡にたどり着きました。予想していたとおり家の姿はなく、ただ焼失した柱の残骸が折り重なり、周囲は一面焼け野原となり廢墟同然の痛ましい焼け跡でした。

兵隊さんが出動して、戦後の始末の為、木製の荷車である大八

車に焼死者の遺体を収容している最中で、偶然私達が避難用に使用していた家の向いの防空壕の中から真っ黒に焼け焦げた遺体数体を運び出しているところに遭遇しました。

母は、遺体に手を合わせ合掌していましたが、人の運命は何時どのようにして決まるのか、もしもあの時、防空壕にそのまま避難していたとしたら「令和」と言う、今日、この日は無かったと思います。

私達は、戦災後、祖母の実家の福沢で一年余り疎開生活を過ごし、昭和二十二年の春、当時、富山市の復興計画が順調に進み空襲で家を失った罹災者の住家を確保するために復興住宅の建設が進められており、簡易住宅を購入して富山に戻りました。

戦災を経験したことで、「戦争を知らない、戦争の悲惨さを知らない」次の世代を担う若者達に「空襲」の実態を継承したく敢えて筆を執らせて貰いました。

戦争の記憶を風化させてはいけないうし、戦争や戦災体験を何らかの形で後世の人たちの為に継承していきたいと思えます。

平和とは、夢や希望を持てる未来があることで、生ある限り戦争の愚かさを後世に訴え続けたいと願っております。

「私が描く富山の未来」

富山市立堀川中学校三年

森川 真尋

「その場の境遇で努力して、今よりちょっとでも前進させることが大事。」富山大空襲を体験し、生き抜いてきた祖父の言葉だ。

今年もコロナ禍の影響で、二年連続富山の花火大会の中止が決まった。私は小さい時から家族で、真夏の夜空を鮮やかに彩る花火を楽しんできた。富山大空襲の二年後から現在まで、復興と鎮魂の祈りを込めて行われている。七十六年前のこの日、私の祖父が富山大空襲で父を亡くしたことを知った。一九四五年八月二日未明の富山大空襲は、一夜にして三千人近い死者を出した。祖父の住んでいた場所は、爆撃の目標中心点となった富山城址公園から目と鼻の先であった。幼かった祖父には、母におんぶされ焼夷弾の雨の中逃げた記憶はない。空襲後の生活は、いつも飢えていて、

中学生作文優秀賞

「私たちがつくる未来」

富山市立呉羽中学校三年
石島 里紗

一九四五年八月一日、アメリカの爆撃機B29に襲われた富山は、一夜にして焼け野原となりました。焼失率九十九・五パーセント、死者は三千人近くに及び、地方都市最悪の被害だったといえます。

私があることを知ったのは、つい最近、修学旅行の事前学習の一環で、富山大空襲についてのビデオを見たのがきっかけでした。そこには、七十六年前の、今の美しく豊かな姿からは想像もつかないような惨状が映し出されていました。焼き尽くされた大地。変わり果てた姿で横たわる人々。それを目にしたとき、ある言葉が頭をよぎりました。一週間前の体育大会の応援合戦。私の団は「紅蓮の炎で焼き尽くせ」と叫んだのです。団員にとっては士気を高めるものとなりましたが、空襲を経験された方々にとってはどうでしょう。戦後に生まれ、当時の悲惨さをよく知らない私たちが軽々しく口にして良い言葉なのでしょうか。改めて考えてみると、何ともいえない、複雑な気持ちになりました。

長い年月を経て、富山は人と自然が共存する明るいまちになりました。近年は富山駅周辺の開発に伴い都市化が進み、昨年の調査では九十一パーセントの人が「住みよい」と答えています。しかし同時に、戦争を知らない人が増え、富山城南東にあるのが何のモニュメントなのか分

命の危険にさらされた事もあったと聞き驚いた。平和で豊かな生活しかしない私に、祖父が生きてきた道を想像することは到底できない。私の為に、過去の記憶をたどる祖父の顔を見て、言葉に詰まった。

思い起こせば、私が戦争に興味をもったきっかけは、戦後七十年の夏に放送されたドラマである。それから私は、歴史についての漫画や伝記を読み、戦争の遺構をめぐる旅も始まった。沖繩の『ひめゆりの塔』『広島平和記念資料館』で見た、オバマ大統領の平和へのメッセージと傍らの折り鶴は忘れない。アメリカのパールハーバーでは、太平洋戦争の歴史とアメリカの人々の戦争に対する思いも知った。過去の歴史に学び、また『どんなことが世界で今起きているか』知ることが大切だと思う。中学校生活最後の締めくくりの年。修学旅行は秋に延期となっている。平和しか知らない若い世代の、平和学習の貴重な機会だ。是非もう一度訪れてみたい。実際の写真や遺品、メッセージをみ

中学生作文優秀賞

「私たちのよりよい未来へ」

富山市立杉原中学校二年
初見 和奏

一九四五年八月一日から二日にかけて、アメリカ軍が富山市に対して行った富山大空襲は、市街地の九九%を壊滅させるものでした。広島・長崎への原爆投下を除く地方都市への空襲としては最大の被害を出したそうです。

壊滅的な被害を受けた富山市ですが、復興には目を見張るものがあり、中でも住宅復興状況は全国罹災都市の中では最たるものといわれたようです。その理由として、富山市の復興計画策定が迅速であったことがあげられています。また、開業医がほとんど疎開し、医療機関は不足していましたが、医療従事者が賢明に診療を行っていたという話に、現在の新型コロナウィルス対応における医療従事者の方々の姿を重ね合わせて、胸が熱くなりました。

私の住んでいる八尾町は、戦争当時に被害は少なく、大都市からの疎開者や旧市内からの親類縁者をたくさん受け入れていたと聞いています。被害が少なかったおかげで、昔ながらの町並みが残り、九月のおわら風の盆には、全国から多くの観光客が訪れています。昨年、私たち杉原中学校の一年生は総合的な学習の時間に、八尾町再発見の校外学習を行いました。おわら風の盆を愛し、支えるために頑張っている方々、曳山祭りや八尾和紙の伝統文化を守り続けている方々に出会いました。戦後すぐに、

て、心が震える体験をしてこそ歴史を深く理解し、今後の自分の生き方に生かせると思う。苦勞や困難を乗り越え、富山の復興や発展に努力された方への感謝の気持ちをお忘れはいけません。

令和へと時代は移り、昨年には南北ライトレールが開通し、ますます便利で快適な暮らしが出来るようになった。現在の富山に戦争の陰は、どこにも見られない。戦争の記憶が風化していく今だからこそ語り継ぎ、次の世代に残すべきものを私たちが考えていく番だ。「私の描く富山の未来」立山連峰の美しい自然を活かした環境未来都市富山。富山の良さを、発信していきたい。夢を持つる働き場所が増えれば若者のUターンにつながり、活気あふれる富山の未来をつくっていけると思う。若い世代からお年寄りまで、皆が手を取り合い、未来に夢をもてる富山を願って・・・

中学生作文優秀賞

「私たちのよりよい未来へ」

富山市立杉原中学校二年
初見 和奏

子供たちが笑顔になるようにとの思いを込めて「こどもや」という駄菓子屋をひらき、今も地元で愛されている方にもインタビューしてきました。また、八尾の魅力のアジアや世界に発信し、観光客を受け入れている女性にもお話を聞くことができました。ほこれる文化が引き継がれていることを改めて知り、八尾町に生まれたことをとてもうれしく感じました。

来年、私たちの杉原中学校は八尾中学校と統合し、新しい中学校としてスタートします。それぞれ、長い伝統と歴史をもった二つの中学校が一つになることに大きな期待と、新しい中学校の最初の最学年として、それぞれの中学校の歴史を引き継ぎながら、新しい伝統をつくっていく責任の重さを感じています。そんな私たちにどうして心強いのは、富山大空襲の被害で何も無いところから新しい町づくりに努力を重ねられた方々やふるさとのよさを伝えることに力を尽くしておられる方々の姿です。二学期から、新しい生徒会の組織やルール等の話し合いが始まります。自分たちの新しい学校づくりのスタートです。一人一人が「自分の学校」という意識をもって積極的に関わっていきなさいと思います。それが、富山市、そして、八尾町の未来の町をつくることにもつながると信じています。「伝統と創造」をキーワードに、がんばりたいと思います。